

金正恩電撃訪中と、 米朝首脳会談の行方

元文化放送キャスター
ジャーナリスト

西山弘道

まさに米朝戦争勃発かといわれた寸前に北のトップが北京に入り、歓迎会で中朝のドンがグラスを合わせ

た。やはり、日本も含む米朝の圧力作戦が北を動かせたのだろう。北の核開発をストップさせようという日米中韓の石油などエネルギーの供給ストップ政策が効を奏したのだ。情報によれば北の市民の間では、食糧、燃料の不足で、地方では暴動が起きる寸前だったという。特に「血の連携」とまでいわれた中国の態度は冷たく、親中派の張成沢の粛清、同じ

く親中といわれた正恩の兄の正男のシンガポールでの暗殺は、正恩の肝を冷やしたといわれている。

ともかく正恩への包囲網はどんどん狭まれ、大国中国の強力なバックアップが必要となったのだ。私が特に目を留めたのは、習近平との会談で、あの正恩がいちいちメモを取っている姿だった。居並ぶ側近の前にメモをとらせてきた姿がこれまでの刈り上げクンの正恩氏のスタイルであつたが、終世の指導者、習近平氏の前ではそのスタイルも通用しなかった。

習金会談の中味はまだ伝えられていない。核開発について不快感を示している中国側がどんな表現をしたのか、五月中といわれるトランプ米大統領との首脳会談の展開などについてどんなやりとりがあつたのかまだ一切明らかではない。



核開発を急ぐ北の意図

北の核開発技術は今でも相当進んでおり、今年6月までには米国本土を射程距離内に収めるICBMを完成させるとみられている。5月中にも行われるとみられるトラン



プ・金会談で米側がどこまで北側を説得できるかだ。まして中国の後ろ盾を得た北側の鼻息は荒くなるだろう。

なぜ北は核開発にこだわるのか。それは初代金日成主席が、いつか訪れるであろう米国との軍事対決に





備え、「早期に核・ミサイル能力を保有すべきだ」との遺訓を残しているからだ。2代目の正日、3代目の正恩もこの金王朝の遺訓を守ろうと必死である。さもなくば「北朝鮮」という存在はこの世から抹殺されるからだ。勿論、北という国土は存続するが、金王朝に連なる権力者どもは石もて追われることを誰よりも知っているからだ。

ただICBM計画の完成は最終段階にはいつているものの、弾道の小型化技術はまだまだのようだ。ミサ

イルの足の部分はもうやらできたものの、肝心の頭と目が機能しなければ、核弾頭は成り立たない。今の北の最新ミサイルは火星15型と呼ばれるもので射程は1300キロ、ワシントンには十分射程に入る。しかし、弾頭が完成しなければ、まだ高級玩具の状態だ。

北がなぜこれほど核にこだわるのか。それは先ほどの金王朝の遺訓であると同時に、イラクのフセインとリビアのカダフィの末路を米国の攻撃で見ているからだ。正恩の頭には

二人の独裁者の末路の恐怖心が植え付けられている。

米韓、南北

こうした中で、南北の首脳会談が4月27日に行われることが決まった。韓国の文在寅首相と北の金正恩朝鮮労働党委員長が板門店で会談するわけである。当然、朝鮮半島の非核化が主な議題となるわけだが、韓国側は北の核ミサイル開発の放棄を強く要請するだろう。一方、北は非核化の意味を5万人におよぶ

在韓米軍の撤退として、韓側に提起するとみられる。

朝鮮半島の流動化に対して、わが日本の戦略はどうなるのか。来月の米北首脳会談の前にも、安倍首相は訪米して、トランプ大統領と会談、日米の意思一致を図る。

一方、日本の対北政策の決定打は今のところない。拉致問題もまだ凍結したままだ。安倍は金正恩や文在寅、そしてトランプのめまぐるしい動きを今のところ指をくわえて見ているという情けない状況だ。